世界文学全集 15

ユゴー

レ・ミゼラブル

Ⅲ

井上究一郎 訳

河出書房

世界文学全集 15 ユゴー III

© 1969

編集委員
阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和36年12月25日 初版発行
昭和44年 8 月 1 日 18版発行

定価 430円

訳 者 井上究一郎
発行者 中島隆之
印刷者 草刈龍平
装 幀 原 弘
印 刷・中央精版印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区神田小川町三の六 株式会社 河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

レ・ミゼラブル　Ⅲ

第四部　ブリュメ通りの牧歌とサン・ドゥニ通りの叙事詩（つづき）

第六編　プチ・ガヴロッシュ……六
一　意地わるな風のいたずら……六
二　小ガヴロッシュが大ナポレオンを利用すること……九
三　脱走の顚末……三三
第七編　隠　語……四六
一　起　原……四六
二　語　根……五四
三　泣く隠語と笑う隠語……六三
四　二つの義務――監視することと希望することと……六七
第八編　歓喜と悲嘆……七一
一　みちあふれる光……七一
二　完全な幸福の陶酔……七七
三　影のきざし……七九
四　いぬは英語でうろつき、隠語でほえる……八二
五　夜のなかのさまざまなもの……九〇
六　マリユスは現実にかえってコゼットに住所をおしえる……九一
七　むかいあう年老いた心と若い心……九七
第九編　彼らはどこへ行く？……二〇
一　ジャン・ヴァルジャン……二〇
二　マリユス……二一

三　マブーフ氏……一二四
第十編　一八三二年六月五日……一二八
一　問題の表面……一二八
二　問題の根底……一二一
三　葬式――復活の機会……一二七
四　過去の興奮……一三三
五　パリの風変わりな点……一三七
第十一編　原子は大旋風に協力する……一四〇
一　ガヴロッシュの詩の起原に関する二、三の説明――その詩におよぼしたあるアカデミー会員の影響……一四〇
二　行進するガヴロッシュ……一四三
三　調髪師のもっともな怒り……一四六
四　少年は老人におどろく……一四八
五　老　人……一四九
六　新入り……一五一
第十二編　コラント……一五三
一　創立以来のコラントの歴史……一五三
二　前祝い……一五八
三　「夜」がグランテールを襲いはじめる……一六八
四　ユシュルー未亡人をなぐさめるころみ……一七二
五　準　備……一七五
六　待ちながら……一七七
七　レ・ビエット通りで参加した男……一八〇
八　おそらくは偽名らしいル・カビュックという名の男についての種種の疑問符……一八三
第十三編　マリユス闇のなかへはいる……一八八
一　ブリュメ通りからサン・ドゥニ地区へ……一八八
二　ふくろうが見おろしたパリ……一九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

三　どたん場……一九三
第十四編　絶望のけだかさ……一九九
一　旗――第一幕……一九九
二　旗――第二幕……二〇一
三　ガヴロッシュはアンジョルラスの騎銃を受けとっていればよかった……二〇四
四　火薬の樽……二〇五
五　ジャン・プルーヴェールの詩句の
第五部　ジャン・ヴァルジャン
第一編　壁にかこまれたなかの戦争……二四〇
一　フォーブール・サン・タントワーヌのカリュブディスとフォーブール・デュ・タンプルのスキュラ……二四〇
二　深淵のなかではしゃべるほかに何
おわり……二〇七
六　生の苦しみにつづく死の苦しみ……二〇九
七　距離の名測定者ガヴロッシュ……二一四
第十五編　ロマルメ通り……二一八
一　おしゃべりな吸い取り紙……二一八
二　燈火に敵意をもつ浮浪児……二二六
三　コゼットとトゥーサンが眠っているあいだに……二三〇
四　ガヴロッシュの度はずれな熱意……二三二
ができよう?……二四七
三　照りかげり……二五一
四　五人減ってひとりふえる……二五二
五　バリケードの上からどんな地平線が見えるか……二五九
六　憔悴したマリユス、言葉少ないジャヴェール……二六二

七　状況は悪化する……二六四
八　砲兵隊は本気になって見せる……二六八
九　昔の密猟者の腕まえと、一七九六年の有罪宣告に影響したあの確実な射撃とがものを言う……二七〇
十　あけぼの……二七三
十一　はずれずしかも人を殺さぬ射撃……二七五
十二　秩序の味方である無秩序……二七六
十三　すぎさる微光……二七九
十四　アンジョルラスの愛人の名はなんというか……二八一
十五　そとへ出たガヴロッシュ……二八三
十六　どのようにして人は兄から父に変わるか……二八六
十七　「死んだ父がやがて死ぬわが子を待つ」……二九四
十八　餌食となった禿鷹……二九六
十九　ジャン・ヴァルジャンの復讐……二九九
二十　死者も正しく生者もまちがっていない……三〇三
二十一　つわものたち……三一〇
二十二　一歩一歩……三一四
二十三　断食のオレステースと泥酔のピュラデース……三一七
二十四　捕虜……三二〇
第二編　巨獣のはらわた……三二三
一　海のためにやせる土地……三二三
二　下水道の古い歴史……三二六
三　ブリュヌゾー……三二九
四　知られていない事柄……三三三
五　現在の進歩……三三五
六　将来の進歩……三三七
第三編　泥であるとともに魂……三四一
一　下水とそのなかでの不意のおどろき……三四一
二　解釈……三四七

三　あとをつけられている男……三四九
四　彼も十字架をになう……三五三
五　砂にも女性のような不実なたくらみがある……三五五
六　陥　没……三六〇
七　上陸できると思ったところで座礁することもある……三六一
八　ひき裂かれた上着の裾……三六三
九　見る目のある人が見てもマリユスは死んでいるような印象をあたえる……三六八
十　いのち知らずな息子の帰還……三七三
十一　絶対者の動揺……三七四
十二　祖　父……三七六
第四編　脱線したジャヴェール……三八二
第五編　孫と祖父……三九四
一　亜鉛板をうちつけた木がまたあらわれる……三九四
二　マリユスは国内戦争から出て家庭戦争にそなえる……三九七
三　マリユスは攻撃にかかる……四〇二
四　フォーシュルヴァン氏が何かのつつみを小わきにしてはいってきたのをジルノルマン嬢もわるく思わなくなる……四〇五
五　金は公証人よりも森にあずけよ……四一〇
六　ふたりの老人はそれぞれの流儀でコゼットの幸福のために最善をつくす……四一一
七　幸福に入りまじる妄想……四一九
八　見つからないふたりの男……四二一
第六編　眠られぬ夜……四三五
一　一八三三年二月十六日……四三五
二　ジャン・ヴァルジャンはまだ腕をつっている……四三四
三　「腰巾着」のケース……四四四

四　不死の心……四四六
第七編　苦杯の最後の一口……四五一
一　地獄の第七圏と天国の第八天……四五一
二　告白のなかにひそむ暗い影……四六九
第八編　たそがれの微光……四七八
一　階下の部屋……四七八
二　さらに数歩後退……四八三
三　彼らはプリュメ通りの庭を思いだす……四八六
四　引力と消滅……四九〇
第九編　最後の闇、最後のあけぼの……四九三
一　不幸な人々にはあわれみを、幸福な人々には寛容を……四九三
二　油のつきたランプの最後のゆらめき……四九四
三　かつてはフォーシュルヴァンの荷車をもちあげた人に、いまは一本のペンさえ重い……四九六
四　ものを白くするにすぎないインクつぼ……四九九
五　夜、そのかなたには夜あけがある……五一八
六　草は隠し、雨は消す……五二九
年譜……五三一
解説……（中島　健蔵）……五四三

レ・ミゼラブル Ⅲ

主要人物

ジャン・ヴァルジャン　ファヴロールの枝切り職人。貧しさと飢えのために一きれのパンをぬすんでとらえられ、トゥーロンの徒刑場に送られる。脱獄を重ね、十九年間の刑期をおえて放免。その年、一八一五年が物語の発端。彼は甦生してモントルイユ・シュール・メールの市長マドレーヌ氏となるが、ふたたび闇の世界にはいる。のちルブラン氏とも言われ、ユルチーム・フォーシュルヴァンとも変名する。物語は彼の生涯をめぐって展開、その死によっておわる。本書の主人公。

シャルル・フランソワ・ビヤンヴニュ・ミリエル　ディーニュの司教。高徳のほまれ高く、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンに大きな精神的影響をあたえる。

ルイ十八世　正統王朝派の国王。フランス大革命で死刑となったルイ十六世の次弟。一八一四年ナポレオン失脚後王位にのぼる。一八一五年ナポレオンの百日天下ののち重祚。一八二四年没。弟シャルル十世がそのあとをつぐ（一八三〇年まで）。王政復古期の国王。

コゼット　ファンチーヌとトロミエスとのあいだに生まれた私生児。孤児となり、田舎にあずけられ、「ひばり」と呼ばれ、虐待される。ジャン・ヴァルジャンに救われ、パリに出ていわばその娘となる。ラノワール嬢とも呼ばれ、のちに幸福な結婚をする。

テナルディエ夫妻　モンフェルメイユの安宿屋の主人。夫妻とも冷酷で貪欲。男はワテルロー軍曹と称しているが、うしろ暗い過去をもつ。コゼットをあずかり虐待する。一家はのちパリに出て下層民となり、男はジョンドレットと称する悪党となる。

ジャヴェール　ジャン・ヴァルジャンを徹底的に追っかけてやまない廉潔で無慈悲な警視。

フォーシュルヴァン　モントルイユ・シュール・メールで車の下敷きとなり、マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）に救い出される。のちパリで女子修道院の庭番となり、ジャン・ヴァルジャンを献身的にかばう。

ナポレオン・ボナパルト　ワテルローの会戦についての作者の回想に登場する。

イノサント女修院長　常時聖体礼拝のル・プチ・ピクピ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ュス女子修道院長。

マリユス・ポンメルシー　ナポレオンによって男爵をさずけられた軍人を父とし、パリのブルジョワの娘を母として生まれた孤児。ナポレオンを崇拝し、大革命の思想に共鳴し、王党派の祖父のもとをとびだして、革命運動に身を投じる。作者の若い日の一分身。コゼットの恋人となり、バリケードからジャン・ヴァルジャンに救い出され、やがて祖父にゆるされて結婚する。

ジョルジュ・ポンメルシー　マリユスの父、勇猛果敢な陸軍大佐。ナポレオン皇帝に献身し、ワテルローの戦場でテナルディエに救い出される。王政復古後、家族とひきはなされて孤独のうちに死ぬ。

リュック・エスプリ・ジルノルマン　マリユスの祖父。女好きの社交人で通したブルジョワの老人。頑固な王党派。その長女は独身、次女はポンメルシーの妻となり、マリユスを生んで死ぬ。マリユスはこの老人とその長女の老嬢とにそだてられた。

エポニーヌ　アゼルマとともにテナルディエ夫妻の娘。ひそかにマリユスを愛し、バリケードでマリユスの犠牲となって死ぬ。

ガヴロッシュ　テナルディエ夫妻の息子。家庭の愛うすく、パリの浮浪児の群れに投じる。一八三二年六月五日の暴動に加わり、反乱軍のバリケードで大活躍するが、弾にあたって死ぬ。

ルイ・フィリップ王　オルレアン王朝派の国王。一八三〇年の七月革命によってフランス国民の王となる（一八四八年の二月革命まで）。七月王政期の国王。

マブーフ　サン・シュルピス教会堂の教区財産管理委員で、植物研究家。マリユスに好意をよせている老人。のちにバリケードで死ぬ。

テオデュール　ジルノルマン氏の甥の子、長女のジルノルマン嬢にかわいがられる陸軍中尉。

アンジョルラス、コンブフェール、ブルーヴェール、クールフェラック、フイイ、バオレル、レーグル（ボシュエ）、ジョリー、グランデール　政治秘密結社ＡＢＣの友の会のメンバー。情熱的な共和主義革命家たち。アンジョルラスはその仲間の首領株。マリユスを仲間に入れ、一八三二年六月五日の反乱を起こし、シャンブルリー通りのバリケードに立てこもって国民軍に抵抗しながら全滅する。

第四部　プリュメ通りの牧歌とサン・ドゥニ通りの叙事詩〔つづき〕

第六編　プチ・ガヴロッシュ

一　意地わるな風のいたずら

一八二三年このかた、モンフェルメイユの安料理店はだんだんに立ち行かなくなって、破産の淵にとは言わないまでも、小さい借金のたまり水のなかに落ちこんで行った。ところがテナルディエ夫婦には、また新しくふたりの子供ができていた。ふたりとも男の子だった。あわせて五人、女の子がふたり、男の子が三人ということになり、これではどうにも多すぎた。

テナルディエのおかみは、奇妙な幸運にめぐまれて、末の子をふたりとも、まだ幼いうちに、ほんの小さいうちにやっかい払いしてしまった。

やっかい払いとはじつに当を得た言葉である。この女はかたよった性格の持ち主だった。これはよく例のあることである。ラ・モット・ウーダンクール元帥夫人と同様、テナルディエのおかみは女の子に対してだけの母親であった。彼女の母性はそれでおわりだった。男の子に対したときには、人類というものへのにくしみがはじまるのだった。息子に対する意地わるときたら非常なもので、彼女の心のその部分は、陰惨な絶壁になって切りたっていた。すでにおわかりのように彼女は長男が大きらいだったが、新しく生まれたふたりもにくらしく思っていた。なぜそうなのか？　その理由。それはこの上なくおそろしい動機であるが、またじつにきっぱりした答えでもあった。さてその理由は。――「ぎゃあぎゃあ泣くうるさい子供なんかわたしにはいらないのさ」とこの母親はいった。

テナルディエ夫婦はいったいどんなふうに末っ子ふたりを首尾よくかたづけることができたのか、またどうしてそのために利益を得さえしたか、それをこれから説明しよう。

何ページか前に顔を出したあのマニョンという女は、自分のふたりの子供をだしにしてジルノルマン老人からまんまと月々の仕送りをせしめていたあのマニョンにほかならなかった。彼女はレ・セレスタン河岸の例の古いル・プチ・ミュスク通りのかどに住んでいたおかげで、自分に対するわるいうわさを逆に人気のようにしていることができた（ル・プチ・ミュスク通り rue du Petit-Musc のむかしの名「売春婦がそこに隠れる」という意味 rue Put-y-musse は《fille publique s'y cache》素姓の知れない女たちの巣であった）。いまから三十五年前、パリのセーヌ川ぞいの一帯に猛威をふるったクループ性喉頭炎の大流行のことは、まだ人の記憶に残っていよう。

医学はそれを好機として明礬吸入法の効果を大規模に実験した。こんにちでは代わってはるかに有効なヨードチンキ外用法がとられるようになっている。さてその大流行の際に、マニョンはまだ年歯も行かないふたりの男の子を一日のうちに、ひとりを朝に、ひとりを夕方に失った。これは打撃であった。母親にとっては貴重な子供たちだった。何しろ月々八十フランになっていたのである。その八十フランは、ジルノルマン氏の名で、彼の年金受け取り人であるル・ロワ・ド・シシル通りの退職執達吏バルジュ氏からきちんきちんと支払われていた。ところが子供が死んだとなると、その定時収入もいっしょに埋葬されてしまうわけであった。そこでマニョンは一策を案じた。彼女が仲間にはいっている悪の暗黒社会では、なんでも知れわたっていたし、秘密はまもられ、仲間同士で助けあっていた。マニョンには子供がふたりほしいところへ、テナルディエのおかみにはふたりの子供があった。おなじように男の子だし、年もおなじだった。一方にとってはうまく形がつくことであり、他方にとってはうまく売れ口がきまることだった。テナルディエの子供ふたりはマニョンの子供になった。マニョンはレ・セレスタン通りをひきはらってクロシュペルス通りに住居を移した。パリでは、一つの通りから他の通りに移ってしまうと、もうだれがだれなのか素姓が知れなくなる。

役所にはなんのとどけも出さなかったので、そのほうからの文句も出ず、すりかえはいとも簡単におこなわれた。ただテナルディエの亭主が子供の貸し賃として月に十フラン出せと言ってきたが、マニョンはそれを受けあい、ちゃんと支払った。ジルノルマン氏が契約を履行しつづけたことは言うまでもない。彼は六か月ごとに子供に会いにやってきたが、子供が変わっていることには気づかなかった。――「旦那様」とマニョンは彼に言った、「ほんとうに旦那様にそっくりで！」

テナルディエは姿を変えるのはお手のものだったので、この機会にジョンドレットにばけてしまった。彼のふたりの娘とガヴロッシュとは、自分たちに小さな弟がふたりいることにはほとんど気づくまもなかったのであった。生活がある程度までみじめになると、人は幽霊にでもなったように無頓着になり、ほかの人間まで幽鬼のように見えるものである。ごく身内の者さえ影のように形がぼやけてきて、人生の暗い奥底にやっと姿が見分けられたかと思うと、たちまちかすんで見えなくなるという状態がよくある。

幼いわが子ふたりを、それっきり手放そうとはっきり心にきめながら、マニョンにひきわたしたテナルディエのおかみであったが、その日の晩になると、さすがにいくらか気がとがめてきた、というよりもとがめるような

ふりをした。彼女は夫にむかって言った、

——「でも、あれじゃあ捨て子だね、まるで！」

しかしテナルディエはしたたか者らしい冷静なところを見せて、つぎの一ことで彼女の気持ちをまぎらした、

——「ジャン・ジャーク・ルソーはもっとうまくやったじゃないか！」（ルソーは家政婦のテレーズ・ル・ヴァスールとのあいだにできた五人の子供を全部孤児院に入れて捨てた）

気がとがめなくなると、母親はこんどは不安になりだした、

——「だけど、もし警察が目をつけたら？　わたしたちがやったこと、ねえおまえさん、うまく通るかしら？」

テナルディエは答えた、

——「何をしたってかまわないさ。だれもあやしいと思うやつはいやしない。それに一スーだってもっちゃいない赤ん坊じゃないか、目をつけるやつはいないよ」

マニョンは罪悪に咲く一種のあだ花であった。身じまいもちゃんとしたものだった。わざとらしい安っぽい家具をそなえつけた家に、ひとりの学のあるフランス化したイギリス人の女どろぼうと同居していた。このパリ女になりすましたイギリス女は、大金持ちとのつきあいをもち、図書館所蔵の古代貨幣やマルス嬢（前出、第三部第八編九）のダイヤモンドとも内々のつながりをもった女だったが、やがて法廷尋問簿の上で有名になった。人呼んで《mamselle Miss》「ミス嬢」と言った。

マニョンのものとなったふたりの子供は身をなげく必要がなかった。八十フランになるというのだから、食い物にされるもののおきまりで、ちやほやされていた。決してわるい身なりなどさせられず、かなりなものをたべさせてもらい、まるで「若様」のようにあつかわれて、実母のところよりも養母のところのほうが居心地がよかった。マニョンはひとかどの夫人のようにふるまい、子供たちの前では仲間うちの隠語などを口にすることはなかった。

こうして数年たった。テナルディエの亭主はこれからもうまく行くものと見通していた。ある日、その月の十フランをもってきたマニョンにむかって、ふっと彼が言った、——「もう《父親》にあの子供たちの教育をしてもらわなくちゃね」

ところがにわかにそのあわれなふたりの子供は、それまでたとえ不幸なめぐりあわせによるとはいえじゅうぶんに保護されていたものが、いきなり人生のなかに投げだされ、自分で人生をはじめなければならなくなった。

ジョンドレットのあばら屋事件のような悪人どものいっせい検挙のときには、かならずあとに捜索や投獄が何度もつづくもので、公けの社会のかげに生きるおそろしい秘密の社会にとっては、じつに災難なことになる。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb